



宮城教育大学
應和 恵子 先生

教育学部 音楽教育講座教授。専門は声楽・オペラ。
兵庫県神戸市出身。声楽の中でも、イタリア歌曲、日本歌曲を専門に指導。前
宮城教育大学附属幼稚園園長(2010年度～2013年度)。学生たちへの指
導の傍ら、仙台オペラ協会演奏部会員としても活躍中。

歌から学ぶ協調性 声も気持ちを伝える大切なスキンシップ。

—声楽・オペラを志したきっかけはなんだったのでしょうか?

子どもの頃から歌も踊りも演技も好きで、中学2年生のときに、NHKの教育テレビで初めてオペラを観たんです。お芝居があって素敵な衣装が着れて、メイクがあって、踊りができる。これは楽しいなと思って、「オペラをやる」と当時の担任の先生との交換日誌で宣言したんです。「がんばってね」と書いてはあったんですが、できるわけがないと思っていたでしょうね。その後普通科の高校に入学し、生物も好きだったのでどちらを取るか進路を迷ったんです。三者面談でそのことを先生に話したら、成績を見て「生物は統計もしくちゃいけないから、あなたの数学では生物は難しい」と言われました(笑)。

そこではっきり音楽の道に進むと決め、声楽に必要な語学などを勉強し、大学院まで行

きました。30歳を過ぎるまでフリーで仕事をしていたのですが、両親から「保険がきく仕事に就け」と言われ、大分大学の教育学部に就職しました。大分で9年教え、その後仙台に来て16年になります。

—オペラとミュージカルの違いとは?

オペラは1600年頃イタリアで、当時音楽を楽しむ余裕があった王侯貴族の間で広まりました。オーケストラで伴奏をして、今でもマイクを使わない歌い方が特徴です。

対してミュージカルはヨーロッパのオペレッタ(台詞と踊りのあるオーケストラ付きの楽しいオペラ)が、アメリカで発展・近代化したものです。内容も貴族や英雄の話ではなく、どこにでもいる人たちのケンカや細かい心理描写など、庶民的でも共感できる内容です。現在では、マイクや効果音など音響技術を駆

使して上演されます。オペラでは「あ～なんて悲しいの～」と歌ったりするんですけど、ミュージカルはセリフと歌が分かれています。

—オペレッタというものもありますね。

オペラに「小さい」を意味するエッタをつけたもので、「小オペラ」とか「喜歌劇」といわれています。最近授業の一環で幼稚園や小学校でも表現の場としてオペレッタをやるようになりましたから、近年できたように思う方もいらっしゃるかもしれませんが、こちらも19世紀の頃からありました。

—幼児教育にオペレッタを取り入れるようになった理由はなんだと思いますか?

今は家中で音楽が楽しめますし、どこへ行っても必ずBGMが聞こえ、店でも雰囲気合ったものが流れていますよね。

子どもに一番必要なのは安心感。
ママが音を楽しめば、それが自然に教育になる。

多様な音が溢れる生活が当たり前となった昨今、ママは子どもにどんな音楽を聴かせてあげればよいのでしょうか。今回ままばれでは、声楽・オペラを研究されている、應和恵子先生のところへお邪魔し、お話を伺ってきました。



今の子どもたちは、音楽をたくさん持ちすぎていて、自分で選べないのではないかと思います。普段、たくさんの音楽を聴いているからこそ、幼稚園では自分で歌ってみたり、みんなと揃えて歌ったりします。社会性を身につけるには歌ってとても良いですよ。

オペレッタには歌うことに加え、台詞と踊りがあります。誰かに合わせて歌ったり踊ったり、順番を守って自分の番になったら歌ったり台詞を言ったり、社会性を磨くための一環でやっているのだと私は思っています。歌も踊りも台詞も色んなことが一緒にできるし、身体全体を使って楽しく社会性を身につける事ができますよね。

—親子でオペラを楽しめる場所がありますか?

残念ながら、仙台では少ないですね。私が会員でもあり、演奏理事を務めている仙台オペラ協会でも、親子と一緒に楽しめる公演は3～5年に一度です。今年は「春のインテルメッツォ2014」という企画で、2月に「セロ弾きのゴーシュ」をやりました。東北を代表する宮沢賢治の有名な物語ですので、親子で楽しめるようにと、3歳から小学校までの子どもとペアで4,000円の親子券を用意しました。その前は「ヘンゼルとグレーテル」でしたが、このときも親子券を作りませんでしたね。終わった後に「お菓子をあげましょう」と私も魔女に扮した格好のまま配ったんですが、小さいお子さんには「ギャーッ」と泣かれて、「そんなお菓子いらない!!」と投げつけられました。そのとき、あ、これはうまくいったなと思いました(笑)。

このように機会はあるのですが、毎年のようにではできませんし、東京から来る公演には親子席が無いものが多いと思います。子どもが泣いたら他の席の人たちに迷惑がかかるのでは、と親御さんは気にしてしまうでしょう。

また小さいお子さんは暗いところに入るのを怖がるので、よほど聞き分けが良くないと中で静かにしてられないということもあります。それに、オペラの内容はあまり子ども向けではありません。色っぽいシーンもありますし…。

—では、自宅で子どもと楽しめる、おすすめの演目がありますか?

先ほど申し上げた「ヘンゼルとグレーテル」はおすすめです。でも長い時間ずっと座っていられるでしょうか。10分とか短時間のオペラでないんですよ。「セロ弾きのゴーシュ」でも1時間20分くらいあります。その間いろいろ気が散る明るいところでTVに映されたDVDをずっと観ていられるような内容かというところ…。劇場だから座っていられるのではないかなと思います。

NHKの親子番組を観ていても分かる通り、着ぐるみが「みんな元気かな?」「さあやってみよう!」と啓発するような動きがないと集中できないんです。わけのわからない格好をした人が、わけのわからない言葉で歌って変に動いているというのを、その場にいればまだ観られるのかもしれませんが、自宅で、おもちゃがあって、お菓子もあってという環境で、果たして観られるかという、難しいかなと思います。

子どもが観るには、オペラではありませんが、ディズニーアニメはおすすめです。いきなりオペラを見せようとするのではなく、アニメなどで鑑賞に慣れさせてから、徐々に興味を持たせれば良いと思います。集中力も養えますしね。

—音感には身に着けておかないと損なのでしょうか?

幼少期に、雑音が入っていないきれいな音

楽を聴いていると、音感が身に付くといわれているようですが、音感がなくても音楽は楽しめます。ただ子どもが充分理解できる簡単なリズムで、気持ちのいいメロディを聴かせることはそもそもマイナスになりませんので、質のいい音楽を聴かせてあげましょう。

また、お母さんが子守唄を歌ったり、一緒に童謡を歌ってあげることは、すごくプラスになると思いますよ。

—子守唄を聴かせる際、歌がうまくないのを気にするママさんがいらっしゃいます。

音楽を教えるためではなく、スキンシップのための子守唄ですから、下手でも抱きしめてあやしてあげることは、とてもいいことだと思います。それでも下手だと自覚して聴かせることに抵抗を感じるなら、いい音楽を流して、自分は子どもを抱きしめてあげればいいんです。無理に歌おうとせず、話しかけてあげればいいんです。有名な子守唄じゃなくても、例えば「チューリップ」やトロの「さんぽ」という曲なんかは、誰でも歌えると思うんです。本当に子どもたちが安心して聴ける、聞き覚えのあるもので、自分で歌えそうなものであれば、何でもいいんです。

—最後に読者のお母さんに一言お願いします。

叩いたり吹いて音が出る楽器で、一緒になって遊んであげれば、小さいお子さんは喜びます。スキンシップをとりながらまさに「音を楽しむ」のが、音楽の始まりだと思います。

初めての子が3歳になったら、お母さんも3歳なんです。どうしていいかわからないとお母さんが焦れば、子どもにも伝わります。ですからそういうときには、ゆったりとした気分になれる音楽を流すのがいいでしょう。お母さんが安心して聴けるものは、必ず子どもも安心しますから。